展望

時の流れに挑む

鈴木　竹志

志垣澄幸の第十四歌集『鳥語降る』を繰り返し読んでいる。他の歌人の歌集とは一連の構成の仕方が違うので、最初は戸惑いながら読んでいたが、慣れてくると、意外性に充ちていて、予想を外されること自体さえ楽しんで読むようになった。何が違うのかと言うと、一連の歌の中の時間の流れがあまりに自由なのである。一連の中に、今現在を詠んでいる歌があるかと思えば、遠い過去を詠んだ歌があり、さらに未来の世界を詠んでいる歌もあるという具合で、普通は一つの連にまとめられた歌の時間の流れは大きく変化しないものなのだが、そういう連は一連もなかった。まさに自由自在の構成である。その端的な例が、歌集の初めのほうにコロナ禍の歌があるのだが、何と終わりのほうにもある。コロナ禍の歌だけをまとめて一連にしようという発想はそもそも放棄しているようだ。自由に歌集を編んでいるのである。読者としては、頁を繰るたびに今度はどんな歌が現れるのか期待しつつ読むことができるのが嬉しい。こちらの予想どおりの歌ばかりでは、退屈しかねない。

しかし、大切なことは詠まれた歌そのものの魅力である。そのことを歌を紹介しながら確認したい。まず過去を詠んだ歌を挙げる。

煤煙に鼻孔が黒くなりし日よ蒸気機関車に枯野越えたり

ペストの世もスペイン風邪の世も照らし今宵は川の中にゐる月

恐竜の肌を灼きたる夏の日がビル照り返す億年を経て

二首目はもちろん「コロナの世」も照らしていることを暗に言っている。三首目の歌の発想には驚いた。「恐竜の肌を灼きたる夏の日」が今も変わらず私たちにも降り注いでいるという歌なのだ。

次に未来を詠んだ歌を挙げる。

八月の屋上にきてやがて津波起こさむ日向灘をながめる

恐竜のごとく人類も滅びむか秋の夜道に月をあふげり

地球とふ星にも水がありたると数億年の宇宙にて語られむ

一首目は恐ろしい歌だが、歴史を振り返れば津波が起きる可能性は低くはない。二首目は、またしても恐竜が登場しているが、恐竜が滅びたように人類が滅ぶのは間違いない。三首目は何とも壮大なスケールの歌で、こんな歌を詠むことのできる作者の若々しい精神に敬服せざるをえない。

最後に、特に感銘を受けた三首を挙げる。

保証期限切れたる臓器下げながら長い堤防の道を歩める

平和あればつづきに戦争のあることをゆめ忘るなよ木々芽ぶく春

思ふやうにならぬがこの世さはあれどひたに生きたり戦後を越えて

一首目、少し寂しい歌だが、志垣は昭和九年生まれだから、確かに「保証期限は切れ」ているかもしれない。二首目、次の戦争の事など考えたくはないが、戦争の時代があったことは確かである。三首目、万感の思いの籠もるこの歌に私は感動した。長く現代短歌南の会の中心メンバーの一人として活躍し、十四冊もの歌集を出してきた志垣だからこそ詠める歌なのである。

老境とは全く縁のない、タイムマシンに乗りこんだかのように、過去、現在、未来を自在に行き来するこの歌集の世界を堪能していただきたい。